

覗き見える世界

【あなたをゆるします】

裏側になにがあるのか、そんなことはわからない

真っ赤でドロドロでグログロの粘着くカスかも知れないだろう

君になにがわかるっていうんだ

ぼくにだってわからないのに

なんでも分かるなんてそんなものは思い込みだ

つけあがるんじゃない

君は神にでもなったつもりなのか

神なんていやしないんだ

世界に満ちているのは神なんかじゃない

人間だよ

薄汚い、人間だよ

そんな目で見ないでおくれよ

やめてくれ

ぼくがなにをしたっていうんだ

本当のことじゃないか

裏切り、貶め、それでも他者が無いとなにも出来ないんだ

そんな卑しい、矮小な存在だろう

死ぬことを定められているんだ

もう遅いよ

僕達にできることなんて何も無い

やめろ、そんな目で見るな

やめてくれ

もう、見ないでくれ

僕はそんな目で見られてはもう、生きては行けない

神の許しがなんになるというのだ！

僕はただ、ただ、君に君だけに許されていたいのだ！なのに何故、君は僕を見ようとすらしないのか！

僕が一体何をした！

君も、僕も、薄汚い浮浪者も、娼婦も、盗人も、官吏も、聖者も、神も…

すべて一緒だ

同じだろう

なにが違うんだよ

言ってみろ、教えてくれ

僕にはわからないんだ！

なぜ！

薄汚いなんてもんじゃあない

黒ですらない色になって、汚れ果てている

もう見ることもはばかられるような

そんな汚い、汚い色じゃないか

君にだけ許されていたいんだ

君に救われたいんだ

僕の神になってくれ

既存の神など僕を救えはしない

あんな汚れきった神などに、一体何が救えるというのか
誰も見向きもしないような僕に、目を向けてくれた

君が救いでなくて一体何だおいうのか

やめろ、否定しないで、そんな

もう、何処へも行かないでください

一人にしないで

もう嫌なんだ

誰も居ない

一人だってことを感じながらにも出来ないでいるのは

もう嫌だよ

君が、君が居なけりゃ僕はなにも出来ない

本当に、もう救いなど存在しない

ああ、なんで君は死んでしまったんだ

僕の救いになれるただ一人のひと

あなたが居ない世界に僕の居場所なんて無い
もうどうでもいい
何もいらぬ。

【夢の証明】

この世界が夢なのだとしてそのことを証明することはできるのだろうか

「私は夢を見ている！これは私のみている夢なのだ！」

などと叫んだところで、証明になどならないことは明白である。そもそもこんなことを叫ぶのは狂人だけだ。まあつまりはまともじゃあないってこと。更に言うと、狂人のいうことをまともに取り合うのは狂人だけだ。世界を占める”正常な”人間たちは狂人の言葉なんて聞きやしない。

「この世界は夢である。」

君がそういうのならきつとそうなのだろう

いつ覚めるとも知らない夢

覚めてしまえばどんなものだったかも忘れてしまう……いや、そもそも覚めることがあるのか、それすらもわからない

夢の証明は、難しい

【夢】

この世界は夢なのだ

私が見ている世界は、私が見ている夢

夢ならば何だってできる

自分の思うとおりに世界を動かせる

なんだって思いのままだ

人々はこのことに気がついていない

みんな知らないから自分の世界でさえ、思うようにできないでいる

私は気づいてしまったのだ……

ところで、これは誰の夢なのだろう

【しあわせ】

壊されることは幸せ

忘れ行かれることは幸せ

取り残されることは幸せ

痛みを感じることは幸せ

孤独は幸せ

【110】

磔にされた人形

壊れた針のない時計

縁の欠けたティーカップ

ひびの入った皿

脚の折れた椅子

しなびた花

【世界の始まり】

黒く渦巻く

いや、色があるのかどうかわからない

何もかも始まり

そこには何も無い

何もないということが本当にあるのかどうか、私には分かりかねることだが……

【異体】

幸せは一体どこにあるのだろうか

大きな幸せを求めもの

小さな幸せを求めもの

大きな幸せは容易に得られるものではない

幸せを探し、しかし得られないでいる間は探すものは苦しみ不幸せを得ることだろう

小さな幸せはそこかしこに存在している

幸せを得ることは容易であるがその大きさは小さい

幸せを得られぬ間をどのように感じるか

その間に何を見るか

何を見ることができるか、何を感じる事ができるか
どれだけのものを自らのものとできるか

皆、異なる

異なるものを見、感じ、取り込んでいく

異なるもので出来上がった私達は同じように幸せを求める
求める幸せは同じだろうか

一つの幸せを分かち合うには世界は異なるものに溢れている
世界はどれだけの異質を抱えることができるのだろうか

【視点】

昔から、ひとの美点にはよく気がついた
しかしながら、自分のこととなると一向に見えてこない

それでも、幼いわたしはなにか自分にも人一倍かやくものがあると思
っていたのかも知れない、覚えてはいないけれども……

なぜだろうか、ひとのことばかり良く見える

かといって、わたしにはひとよりも魅力がないなどということは思っ
ていない

わたしにだってキラリと光るなにかはあるはずだ
信じているが、見えたことは一度もない

「光り輝かぬものなど無いのに」

【教え】

人智の及ばぬものに命運を委ねる。それが宗教であると我々は知らなかった。

【神話】

私はいま、考えることに夢中です。一日のなかで考えていけない時を除くと考えることをしていない時間はないほどです。もうやめられませんが。考えることは私をこの上なく幸せにしてくれます。世界は暗く、淀んでいます。停滞し、生み出すものは苦しみのみです。そんな世界で私は夢を見ることも忘れて日々のなかでただ息をしているだけのモノでした。そこで生み出される苦しみは私の中に入り込んできます。私のなかで苦しみは増え続けました。どんどん増えて私の中の私は苦しみに圧迫されてしまうのです。私の中にはもう、私の場所は米粒ほども残らないのです。私は苦しみの奴隷でした。私を動かしていたものはもはや私ではなくて生み出された、そして生み出される苦しみだったのです。私は私ではなくなります。私を備えた苦しみだったのです。もはや、苦しいとも、悲しいとも感じることはなくなり、心地良いとも、嬉しいとも、なにも感じません。ただただ動き続ける私がそこにいるのみです。

世界は色を失い沈んでいくのでした。どこまでも深く、光の届かない、静かな、冷たい、重苦しい水底へと沈んでいくのでした。

ある時、それがいつであったのかももう思い出せないほどの昔ですが、私はふと、考えごとをしていたのです。それまでは全くなにかを考えるなどということとはなかったのです。本当に偶然でした。考え始めると私は止まれなくなりました。考えているときには、私の世界は色を取り戻し、光のさす方へと浮かび上がっていくのです。私は考えることで救われたでした。考えることは私にエネルギーを与えてくれたのです。

いまでは、もう考えることしか考えられない。私は考えることでひとに戻れたのです。悲しみも苦しみも、全部感じることできる、本当のひとへと。今の私はなんだってできる。私を動かすのは私。私は本当の私として歩き始めたのです……

あなたは、どうですか。本当のあなたに、なってみませんか。

さあ、一緒に。

【求められて】

いつだって信じるものは必要だった。みんな口を揃えて言う。「今の時代には信じるものが必要だ」って。

【妄想】

妄想にとりつかれた哀れな囚人
自由であると妄想し
一指も動かぬ動かせぬ
ただ開かれる瞳には
映るものなく濁り淀むのみ

【笑顔】

灰色の壁に伸びる蔦植物の模様を眺めて

私はある人と歩いてゆく

あの人はよく動く

私の歩く速度に合わせてくれているのだろうか

笑顔

【cowardice】

恋をすることに臆病になる気持ち

強い想いを抱いた記憶

抱いた想いの消えたあと

あとには一体なにがある

どんなに強く想おうとも

いずれは薄れて消えてゆく

胸に残った虚しさ

向き合うほどの強さを持たない

私は弱い、よわい

【知らなかった】

何も知らない

何もわからない

どこを見て進めばいい？

何を信じて生きればいい？

何も見えない

何も聞こえない

闇の底でうずくまるしかなかった

突然にはじけたようだった

わけがわからなかった

どうやら光が投じられたらしい

だんだん、わかってきたんだ
すべて納得できた

【省察】

私が世界から去るとき、世界は私を覚えているだろうか
私は世界になにをのこせるのだろうか

私のために世界はあった

世界のために私はあれたのか

私と世界の関わり

世界という存在と私という存在

闇に沈み、何も見えないような
光で溢れ、何も見えないような
無力な存在

怯え、震えることしかできない

そこには、何が在る

世界に怯え、震える私
私に怯え、震える世界

ただただ哀れな存在たち

【記憶】

私を殺すものよ

私の心臓をとめるものよ

私の鼓動を覚えておいて

私のい落ちの尽きるまで

音を聞き、脈を感じ

私のぬくもりのなくなるまで

私を感じていてくれ

音が、脈が、ぬくもりがなくなってからも

私を覚えておいてくれ

【創出】

無声映画を観たくなった

白黒の無声映画

音のない、色のない、世界

そこに何を見るのか

何をそこで見せるのか

狭まるのか

広がるのか

浅いのか

深いのか

限られた記号の世界

世界を制限する

それは制限することなのだろうか、本当に

無限の世界につながる扉

旅の始まり

【日記】

いつのことだったか、ある夜更けのこと。

そう、私がいつものように日記を書き終え、意識を手放し、深い眠りの底へと沈もうとしたときのことだ。

不意に、とても澄んだ綺麗な鈴の音が聞こえてきた。その当時も今と同様、私の部屋には鈴のようなものは置いていない。

一瞬、友人のだれかが置き忘れたのか、落としていったのか、という考えがよぎったが、私はこの部屋に友人を招いたことなど一度もないし、そもそも、私には部屋に招くような友人などいないということには私が一番知っている。

そんなことを考える私に鈴が話しかけてきた。

「わたしは鈴です。」

「そうか、君は鈴なのか。私が睨んだとおりだ。どうだい、記念に握手をしようじゃないか。」

「今までわたしに握手をしようなどと言ってきたのはあなたが初めてですよ。」

「そうかい、それはいい。さあ、握手だ。」

私は鈴と握手をした初めての人間らしい。

私はにやりとした。なんだって一番初めになるってのは緊張もするがなんだか嬉しくもなるものだ。

「よし。今から君は私の友人だ。よろしく頼むよ。」

「よろしく。あなたははじめての友人です。」

私は嬉しくなって友人と一緒に、歌いながら坂を歩いて行った。

楽しく歌っていたのだが、楽しくなりすぎて足元が見えていなかったらしい。私は石につまづいていてしまった。

つまづいた私が手を出すこともせず、ゆっくりと倒れていくのを私はただ眺めていた。

ついに鼻先が地面に吸い込まれようというとき、私は覚醒した。丁度、鼻先が日記帳へと吸い込まれるところであった。

【美しい国】

「桜の木の下には死体が埋まっている」

「だから桜はあんなにも妖しく美しく、人を惹きつけるのだ」
誰もが口を揃えていう。馬鹿げたことを。

あんたらは何も知らないんだ。いや、知らないはずはない。知らんぷりをしていただけだ。

死体が埋まっているのは、なにも桜の木の下だけじゃない。この国で死体の埋まっていない場所なんて、もうどこにもありはしないのに。

長年の教育で臣民の誰も彼もが「愛国心」を持っていた。だれもかれもがお国のためと言って死んでいった。お国のためがなんのためなのか、わかっているものなどいなかった。けれどもずっとそれが正しいって言われてきたのだ、間違っているはずがない。

今じゃこの国で、死体の埋まっていな場所なんてない。誰も彼もが死体の上に立っている。

「この国の足元には死体が埋まっている。だからこの国はこんなにも妖しく美しく、人を惹きつけるのだ」

【だれ】

対峙する相手に依って影響を受けているという自覚はある

口調や態度など

言葉遣いや気持ちも

こんな影響を受けていて私は本当に私なのか、心配になることもある

でも、これが私であるということ

私の個性であるということ

認めて付き合っていくのです

【おもい石】

思いのぶんだけ重くなる石

水底に沈む

空を飛ぶことは夢の彼方へ

【憧れ】

みんな、なんでそんなに輝けるのだろう
キラキラと輝いている

私はなんでこんなに眩しく感じるのだろう
まぶしすぎて見ていられない

ここは暗い穴の底なのかな
暗く、重く、淀んだせかい

私の世界がそんなだからみんなのキラキラが眩しいのかな

私は、私の持っていないものをみんなが持っているのが羨ましいの
あんなにキラキラしてる

ほしいよ、ほしい

……でも、きっと触れたら壊れてしまう
崩れてしまう

私はキラキラにたえられないだろうなあ

【あるもの】

「それはとてもとても大きなものであるから、きっと、すぐに見つかるだろう。」

「ああ、たしかにすぐに見つかった。とてもとても小さなものであった。」

【隙間】

心の隙間

隙間を埋めるのはなにか

色んな物をはめてみたけど、どれもしっくり来ない

隙間は埋まらない

この隙間はなんなのか

隙間は埋まらない

【ばんざい】

とてもいい天気だ
空は青く晴れ渡り、
草木は青々と茂り、
視界の端では雲が湧き上がる
生命力にあふれている

【おなかの空いた芋虫の話】

あるところに一匹の小さな芋虫がいた

芋虫はとてもおなかを空かせていた

空腹を満たすために、芋虫は葉っぱを食べ始めた

しかし、何枚食べてもおなかは満たされない

葉を食べ尽くした芋虫は次に枝を食べだした

しかし、何本食べてもおなかは満たされない

枝を食べ尽くした芋虫は他の植物を食べだした

しかし、いくら食べてもおなかは満たされない

陸の植物を食べ尽くした芋虫は陸の動物を食べだした

しかし、何体食べてもおなかは満たされない

陸に食べるものが見つからなくなっても芋虫のおなかは満たされない

芋虫は海を飲みだした

しかし、どれだけ飲んでもおなかは満たされない

海を飲み干した芋虫は、ついには陸を食べだした
しかし、どれだけ食べてもおなかは満たされない
陸を食べ尽くした芋虫は空を飲み込んだ
しかし、おなかは満たされない

芋虫は世界を食べ尽くした

世界には、もう芋虫の食べるものは存在しない

世界には、もう芋虫しか存在しない

芋虫は、世界を飲み込んだ

芋虫は、世界になった

【灯】

嫉妬に狂い身を崩し

何ものも為せぬ私（わたくし）ですが
役立たずゆえにできること

世界の芯でひとり立ち

嫉妬の炎を身にまとい

この世の中を照らしましょう
隅まで明るく照らしましょう

儂き我が身の尽きるまで

【かなしみ】

かなしいなあ、
かなしい、
かなしいよ。

【ばけもの】

おそろいしい化物

おぞましい化物

人を傷つけ、人を殺し、人を喰らう

化物は恐怖であり、恐怖は化物であった

ある日のこと、化物は恋と出会う

とても可憐で美しい

化物は恋をした

美しい

愛しい

力強い

化物は恋のことしか考えられない

恋のために爪を切り、恋のために牙を砕き、

恋は化物を化物ではなくさせた

【沈み】

なんでだろうか、とても沈んでいる

変な沈み具合だね

沈んでいるような、浮かんでいるような

このままここで不安定なままで

ずっと、ずっとさまよおうのだろうね

【商い】

秩序の切り売り

人間相手の商売ではこれが一番受けがいい

【おもい】

なぜなのか、と問いかけてみる
答えはわかっているはずなのに

あなたの前では素直になれない
素直に口にはしたくない

恥ずかしいのです

【風】

洗濯物になりたい
物干しに吊るされて
吹く風に揺られて
おひさまをいっぱい
に浴びる
ふわふわの洗濯物

【はればれ】

こんななにい天気の日にはとっもいい気分になれる
どこまでも行けそうな澄んだ空を眺めて僕は
なんでこんなな悲しくなるのだろうか
一人で眺める空の悲しさ

こんなないい天気の日には

【旅】

このまま何処までも行ってしまいたい
何処までも、何処までも

この果てしない空の下

この果てしない世界のなか

この果てることのない気持ち
を糧に

何処までも進んでいきたい

何処までも、何処までも

【存在】

何処にいるんだろうか、

そこは一体何処なのだろうか

ここは一体何処なのだろうか

存在するの

あるのか

【存在する】

そこにあるってことを知覚する

ちがうな、そこにあるんだ

これは確かだ

あることは確かにある、それをどう説明するか
言葉を尽くす程度で説明が終わるのか

【好き】

好きだから

好きって言葉しか出てこない

もっと伝えたい

まだまだ足りない

こんなもんじゃないのに

こんなもんじゃないはずなのに

なんで伝えられないんだろう

なんで言葉が出ないんだろう

言葉が欲しい

君に伝える言葉が欲しい

【悪趣味】

「頭の中がぐちゃぐちゃになってルンダよ」

「あいつも、こいつも。みんなぐちゃぐちゃなんだって」

「君はもう少しイカしたやつだと思っていたのに」

「これ以上ラクタンさせんかって」

【説明】

「だるいなあ」ておもうでしょ

「手もあげらんないや」ておもって見たら手がないんだよね

「ああ、そういえばきのうトイレに落としてそれっきりだったや」て思
い出したらそこで眠くなっちゃったんでそのまま寝たんですよ

それっきり、いまのいままで気づかないで眠っていたってわけです
こんなかんじでせつめいはおしまい！

さあ、こんどはそっちの番だよ

【繰り返す】

回り続ける

いつまでも

何処までも

私はまわる

回る世界のその中で

私はずっと回り続ける

永久の彼方へ回り続ける

何処へ行くのかわからないまま

回り続ける私がいる

【贖罪】

罪の心臓

杭打たれなお脈打ち続ける

赤いしずくを滴らせ

生命の時を刻み続ける

罪の心臓

茨を纏い脈打ち続ける

鋭い刺に身を搔かれ

贖罪の傷を刻み続ける

【闘争】

思い描いたものをそのまま表すことができればどれだけ素晴らしいだろうか。想像して見給えよ。私の考えていることを、君の考えていることを、そのままに世界に表すことができないのであればどれだけ素晴らしいことか！我々は世界に怯えてきた。引け目を感じ、コソコソと日陰で隠れながら暮らしてきたのだ。そんな我々が世界に怯えることなく、大手を振って陽のあたる場所を歩くことができるのだ。これはとても素晴らしいことだよ。我々は自身の尊厳を勝ち得ることになるのだ。

【政治】

人間が多すぎる

もう少し減らしたほうがいいんじゃないか

【深度】

不透明な液体の満ちた器の深さは測れない

いくら覗いたところで底など見えない

潜ったところで何も見えないのだ、まっすぐに潜れる保証など存在しない

信じるだけしかできない

信じただけの深さになるのだ

【境】

物悲しい音色を撒き散らす
橙色の雲たちがゆく
空の果ては薄紫に
世界を飲もうと口開く巨人
巨人の中に夜がある
夜は巨人の支配下にある
夜の王は

【炎】

おちてゆく

ひらひらと

炎は燃える

登ってゆく

火の粉達

何を残し、何を連れ行く

あるものはなく、ないものはある

そうさだめられて、きた

【眠り】

ここはどこだろう

蒸し暑い

ドコからか羽虫の飛ぶような、モーターの回っているような鈍い音がする

真っ暗だ、何も見えない

何も見えない？ちがう、何も見ていないんだ

目を明けてみろよ

【人】

人形が人間みたいだ

人間が人形みたいなのかな

僕にとってはどちらでも構わないことである

そのはずだ

僕は人形だったとして何か問題があるのだろうか

僕が人間だったとして何か解決するのだろうか

何も変わらないよ

何も変わらないよ

【寂しさ】

誰もいないって言うことが確かにそこにある
何もないってことが確かにここにある
さみしいんだよなあ
なんでだろうな

【ある日】

とても優雅な休日を過ごしている。セックスについて考えていたらいつの間にか時間が経っているような、そんな休日を過ごしている。こんなにも優雅な休日を過ごしてしまっただろうか、とそんなことを考え始めたところで夢から覚める。いまは週末、雨降る土曜午後〇時です。

【セックス】

一体、どこからセックスなんだろうか

性器と性器との接触

性器と手との接触

口唇と口唇との接触

手と手との接触

どことどこが触れ合えばセックスになるのだろうか？

どんな条件が必要なのか？

意識してしまふと一瞬の肌のふれあいすらも心臓が高鳴る

期待して落ち着きがなくなる

どうしたって考えてしまふ

頭の中にはもうあの人のことしかないんだ

全部あの人のせいだよ

あの人の前では全部をさらけてしまふ

隠していたいって思ったって、そう思うことがすでに僕を苛む
チクチクして、ムズムズして、何も手につかなくなる
あの人に、ずっと僕を見ていて欲しい
どうしたって、それ以外は考えられない

【無理難題】

月に対して太陽よりも明るく輝けと言えるかね？
そんな残酷なことが、君には言えるかね？

私にはできない

そんなことを言えるようにはできていないんだ

【豆球】

きゅぼん

と

うまれて

そのまま

はじけた

きえていくときまで

とても綺麗だとおもった

【主人公】

君になにをしてやれるだろう

思っていた

僕には出来ないことはない

でも、

僕にはなにも出来はしない

僕は、確かに、「ここ」にいるのに

知ってしまった

ここは、僕の世界の中心だと
でも、

ここは、君の世界の周縁だと

【やさしさ】

「おねがい、死なないで」
君はそうつぶやいて
指をかけた

「おねがい、泣かないで」
僕は笑いながら
手を重ねた

【お祭り】

楽しい喧嘩か？

みんなが笑顔になるような喧嘩をしろよ

その場にいる奴らがみいんな笑顔になるようなやつだ
ただ、

最後に残ってるのはてめえだけでいいな！

【とんぼ】

まわれよまわれ
ぐるぐる回れ
どこまでも飛んでゆけ

【貢物】

首を捧げる

噛み付く

噛み付かれる

恍惚とした表情

流れる時間

しびれ

薄れる

感覚

うすく

引き伸ばされてゆくような

ひろく

溶けてゆくような

一瞬で終わってしまふ
永遠に続いてゆく

幸せに満ちた、時間

【職務】

救われたいと願ひ

救われると信じ

盲目的に「善行」を重ねる

哀れな

悲しい

化け物たち

救済されるべき魂たちのなす行列を眺める

【恵】

人間の生まれた苦しみの枯れる果てに雨の降る優しい大空から降り注ぐ慈愛の土くれ

【懇願】

吐きそうだ

何もかも吐き出しそうだ

腹の中身がひっくり返って全部出てきてしまう感じ
どうしたらいいっていうんだ

クソ

何もかも嫌になるな

子どもの騒ぐ声も

バタバタと騒がしい

羽虫が顔の周りで飛んでいる時のような

鬱陶しくてイライラして

みんな死んでしまえばいいのに

そう、死んでしまえって思う

僕が殺すのは大変疲れてしまう

面倒くさい

だから

死んでくれ

できるだけあっさり

できるだけ凄惨に

僕に気づかれることなく

「死んでください、お願いします。」

【にくしみ】

体の節々が痛い

きしきし

じくじく

うんざりとしてくる

どんより

淀んだくうき

世界が全部

敵に回って

僕のことを狙ってる

生命を狙ってる

財産を狙ってる

体を狙ってる

頭脳を狙ってる

狙われまくり

出血大サーブスだ

はあ、

みんな苦しんで死ねばいいのに

【地上】

大地が落ちていく

真っ逆さまに

落ちていくんだ

僕の上に影を落として

近づいてくる

音のない世界

音はある

でも何も聞こえないんだ

動きを止めた世界の中で

僕ははっきりと見た

大地が落ちていく

【封印】

悲しみと

苦しみと

愚かなもの

諸々を

地に穴を掘り

放り入れて

蓋をする

【なぞのなぞのなぞ】

「加害者としての自覚を持って！」

明美（あけみ）の叫びは虚しくこだました

加害者こと正明（まさあき）は明美の目の前に横たわっている
もう息をしてはいない

当然、心臓も動いていない

明美の言葉に正明はなにを思うだろうか

きっと、何も思わないだろうか

何故って、

正明の体には首から上がなかった

首なし

なんと正明は首なし人間だったのだ！

首なし人間はきっとカオナシの仲間だろうか

いや、待てよ……

カオナシよりもデュラハンのほうがぼいな？

でもデュラハンは女性だし……

なんてくだらないことを考えているヒマはない

そう

正明は死んだのだ

なぜ？

明美は被害者で正明は加害者

なんて明美の目の前に首のない正明が転がっているのか

正明の首はどこに転がっているのか

謎は深まるばかりである。

【信仰】

神に救われたと思ったことはない

信じていないから

信じる者しか救わない神

信じる者しか救われない

信じていない者が救われたと思うだろうか

私はどうだろう

信仰しているか

信じているか

救われているか

救われたと思っているか

救われたい
苦しみから
苦しみから
悲しみから

【処方箋】

毒をあおった

かなしみを

忘れさせてくれる

毒を

私の悲しみを忘れるために

恋人を悲しませた

恋人の悲しんでいる姿を忘れるために

毒をあおった

毒に頼らないと生きてゆけない

生きるために毒をあおる

呼吸と一緒

息をするように毒をあおる

【問】

「なんで生きてるんだ」

何度目の問いかけだろう

もう何度も同じことを聞いている

はっきりした答えが出たことはないし、これからもきっと出ない

答えが出ないってわかってるのになんで繰り返し問うのかわからない

癖みたいなもの

そう、癖になってしまった

こんなことを繰り返し返して何にもならないのは判っているんだ

判っているならやめればいいのに

やめようとしらないのは

とても愚かなことに思える

事実、とても愚かなことだろう

いっそ死んでみてもどうだろうか？

一度、死ねばスッキリするんじゃないだろうか？

【電球】

頭がぐるぐると回る

そのうちキュポンと

抜けた

そのまま落ちていって

地面に

当たると、

と、

割れた

きれい

【どくはく】

そこに僕の居場所はあるのだろうか
そこはとにかく居心地が悪い

僕は嫌いだった

大嫌いだった

憎んでいた

そこにいるだけでイライラした

そんな状況をよしとしていたわけじゃない

居づらい場所を居やすいように変えていこうとしたこともあった
結局、

挫折してしまっただけけれど

環境を変えられるほど僕は強くなかったということ
それに、

環境に合わせて変われるほど僕は強くもなかったということ

弱かったから強がっていた
強がるだけで強くはなかった

結局、
逃げ出した

しばらくしたら
しっぽを振って戻っていった

喚き散らしても
気を晴らそうとしても
気は晴れない

意志薄弱で

哀れな

負け犬

弱い

弱い

【ここそこ】

誰もいない

誰もいないっていうことが
確かにそこにある

何もない

何もないっていうことが
確かにここにある

さみしいんだよ

なんでだろうな

【誘い】

「あなたは
優しく叩かれるのが、
好きなんですか？」

「僕は
優しく締めあげるのが、
好きです」

【最果て】

美しい物の美しさゆえの

醜いものの醜さゆえの

悲しみは果てて

喜びは枯れて

地上には天国が

天には地獄が

果てることは

ない

【あとがき】

「逆再生でも復活でもなんでもいいけれど数人分まとめればらばらになつて混ざっちゃつてる死体を戻そうとしたらどうなるんだらうか、ちゃんと一人々元に戻るのだらうか。ひき肉のようになってしまったら。ペーストのようになってしまったら。無事に元に戻るのだらうか。調理されてしまったら、食べられてしまったら、いったい、再生は成功するのだらうか……」

などということを考えながら、私は文字を書こうとしている。私にとって文字を書くことは、一体なんなのか。私にとって表現するのは一体なんなのだらうか。何を表現するのかということよりも、表現すること自体が私には大切なこと。世界に私を押し出す。私が確かに底に居ること、私が存在していることを示そうとしている。精一杯、生きてるってことを示そうとしているのかもしれない。自分を世界に対して示すってことはとてもむずかしいように思える。とてもエネルギーの必要なことと思う。で

も、やるんだ。示し続けることに意味がある。
こんなことを考えながら詩作をする。手を動かす私がいる。

覗き見える世界

発行日 2016年8月10日 初版第一刷

発行者 変態美少女ふいろそふい。

著者 きのこ

連絡先 circlemaster@hentaigirls.net (Mail)

<http://hentaigirls.net/> (Web)

印刷 ポプルス

表紙イラストを含む全ての作品は CC BY 4.0 でライセンスされており、ライセンスの条件に従っている限り自由に利用できます。CC BY 4.0 の詳細は以下の URL で確認できます。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>